

謝罪とその受け入れのプロセスに見る相互行為 —アメリカ英語の謝罪談話の事例研究—^{注1}

大谷 麻美
(京都女子大学)

1. はじめに

謝罪は多くの言語において行われる行為である。そのため、従来の発話行為論や社会学では、その行為の特徴を一般化して論じることが多かった。(e.g., Searle, 1969; Goffman, 1971; 山梨, 1986) しかしその一方で、対照語用論や社会言語学の分野では、言語・文化によって、謝罪の対象、ストラテジー、談話スタイルなどの具体的な運用の部分にかなりの差異が見られることも指摘されている。(e.g., Kumagai, 1993; 池田, 1993; 三宅, 1993; Tanaka, Spencer-Oatey & Cray, 2000; 大谷, 2004)

そこで本稿では、社会言語学の立場から謝罪談話の分析を行い、日本語のそれとしばしば比較される英語の謝罪がどのような行為であるのかを明らかにする。これまでの多くの研究では I'm sorry. などの謝罪の定型発話や、それに付随して用いられる謝罪ストラテジーの分析などが多く行われているが、本研究は、さらに視野を広げ、謝罪が行われ、受け入れられ、完結するまでの談話を分析対象とする。そこに見られる謝罪する側とされる側の相互行為を明らかにすることで、英語の謝罪行為の特徴を明確にしたい。

2. 先行研究と問題の所在

謝罪に関する研究は多方面から行われているが、ここでは、先行研究を二つの観点から概観する。一つは、言語を特定せずに謝罪という行為を一般化して論じる研究である。もう一つは、特定の言語に焦点を当てて、あるいは二言語以上を比較して、その言語の謝罪ストラテジーやスタイルを明らかにしようとする研究である。その中でも本節では、本論の調査対象である英語に関する研究を中心に概観する。

2.1 謝罪行為を一般化して論じる研究

謝罪という行為の特徴を一般化して論じようとする研究には、社会学と発話行為論からの論考を挙げることができる。前者としては、Goffman(1971) が代表的であろう。彼は、我々の生活の中で何らかの違反行為 (infraction) が生じたときには、修復行為 (remedial work) を行うことが規範となっていると指摘した。そして、謝罪はその修復行為の一つとして考えられている。Goffman は、修復行為を、ある行為を無礼な (offensive) なことから受け入れ可能な (acceptable) ことに変えることだと定義している。また、謝罪については、侵害 (offence) に対して罪の意識を感じている (guilty) ことを示すことであり、また、違反行為 (delict) から身を引き、ルール違反をしたことを認めることだと定義した。

一方、Austin(1962) らに端を発する発話行為論では、謝罪を発話行為の一つととらえ、適切な謝罪とはどのような行為であるのかを一般化して論じようとした。Austin や

Searle(1969)らの研究を受け、山梨(1986)は、様々な発話行為を対象に、その発語内行為を一般化して説明する適切性条件の提示を行っている。そして、その中で謝罪の適切性条件も示している。この試みは、謝罪という行為が適切に遂行されるための条件を記述することで、その行為特徴を一般化してみせた点に意義がある。

しかし一方で、このような発話行為論の適切性条件は、実際の謝罪には必ずしも当てはめることができないという批判も多い。たとえば、Thomas(1995)やMurata(2002)は、実際の会話や手紙の中の謝罪をデータとして分析し、その条件に当てはまらない謝罪が多く見つかること、それらの研究が話し手の意図だけを焦点としており、聞き手の解釈を視野に入れていないこと、さらに、謝罪が理解される過程の文化的な多様性が考慮されていないことなどを問題点として指摘している。

2.2 英語の謝罪の特徴に関する研究

一方で、1980年代以降は、語用論や社会言語学の分野で会話/談話分析の手法を用いて、特定の言語における謝罪の特徴を解明しようとする研究が増えてきた。英語の謝罪研究もこの流れの中で行われたものが多い。中には、英語ともう一言語を対照することで、各言語の特徴をより際立たせようとする研究もある。

Holmes(1990)は、ニュージーランドの英語コーパスから謝罪と謝罪への返答の発話を抽出し、そこで用いられるストラテジーを分析した。その結果、I'm sorry. のような明示的な謝罪表明のストラテジーを単独で用いるよりも、いくつかのストラテジーを組み合わせて使用する場合が多いこと、また、そのストラテジーの組み合わせは「明示的な謝罪の表明+説明・理由」「明示的な謝罪の表明+責任の表明」が圧倒的であることを明らかにした。

また、Kumagai(1993)は、アメリカ英語を中心とした英語と日本語のテレビドラマなどのシナリオを用いて、謝罪のストラテジーの種類、ターン数、ストラテジー配置、相手の反応などを分析した。その結果、日本語と比較してアメリカ英語では、ターン数は少ないものの釈明のストラテジーを多く用いて、合理的に(rational)問題を解決してゆこうとすることを示した。

池田(1993)は、日本人とアメリカ人の大学(院)生を対象に、設定した場面にどのように行動をするのかをたずねる質問紙調査を実施した。アメリカ人は、日本人以上に説明や弁明を行い、補償の申し出をすることが明らかとなった。また、日本人以上に複数のストラテジーを使用して謝罪を行うことも指摘した。そしてアメリカ人の謝罪は問題解決重視であるとし、Kumagaiの結果と一致するものとなっている。

大谷(2004)は、謝罪が送り手の心理に基づく行為である点に着目し、日本人とアメリカ人を対象に、設定場面での発話を調べる談話完成テスト(DCT)と、その時の心理状態を問う心理要因スケールテストを併用し、謝罪を行う場面でどのような心理を強く感じているのかを調査した。その結果、日本人は謝罪を行う際に、「相手の迷惑」を意識しているのに対し、アメリカ人は「自分の責任」を強く意識していることが明らかとなった。

2.3 問題の所在

このように、実際の謝罪は、発話行為論や社会学で指摘されてきた一般化された行為特徴だけでは説明しきれず、その研究の関心は各言語の個別性を解明する方向へと向かっていると言える。英語の謝罪に関して言えば、すでに上記のようにいくつかの特徴が指摘されている。しかし、一方で、課題も残る。それは、多くのデータがDCTのような質問紙によるものだという点である。そのため、謝罪する側の発話だけに着目した研究、あるいは、たとえ謝罪される側を視野に入れたとしても、謝罪に対する数ターンの返答部分だけを取り扱う研究が多くなっている。しかし実際には、事態が深刻であればあるほど、謝罪が受け入れられるまでのプロセスで、両者は多くのターンを使用して、様々なことを述べ、行うはずである。そのプロセス全体を検討する作業はまだほとんど行われていない。また、そのためには、自然談話、もしくは自然談話に極力近いデータを調べることが不可欠である。

3. 目的

以上の先行研究の課題を踏まえ、本研究では、謝罪の談話の範囲を従来の研究より広くとらえ、謝罪が行われ、それが受け入れられて完結するまでのプロセスを対象とする。そして、謝罪する側（以下、謝罪者とする）だけではなく、される側（以下、被謝罪者とする）との相互行為に着目して、アメリカ英語（以下、データの分析に関して「英語」と言及する場合は「アメリカ英語」を指すものとする）の謝罪の行為特徴を明らかにする。具体的には、謝罪が完結するまでの談話で、両者が何を行っているのかを談話分析の手法を用いて読み解く。同時に、謝罪者、被謝罪者の意識や解釈をフォローアップインタビューから分析し、談話の分析結果と総合して英語の謝罪がどのような行為であるのかを考察する。

4. 謝罪の定義

本稿での謝罪の定義は、ひとまず上記のGoffmanにのっとることとする。しかし本稿は、言語・文化ごとに謝罪行為に特徴があるという立場をとる。そのため、本調査により、英語の謝罪に特有の行為特徴を明らかにすることとなる。

5. データ

英語母語話者による1本の謝罪のロールプレイ談話と、そのフォローアップインタビューをデータとして用いる。本研究の目的のためには、自然談話を用いることが理想的ではあるが、謝罪はいつ生じるかが予測しにくい行為であり、また、謝罪者の面子にかかわる行為であるため(Brown & Levinson, 1987)、実際には謝罪の自然談話を収集することは極めて困難である。そのため、本研究では、実験的に場面を設定して収集したロールプレイ談話を用いる。

実験は、謝罪の生じそうな場面を設定し、その際にどのようなことを言うのかを演じさせたものである。実験協力者はアメリカ人大学生、大学院生で、英語を母語とする者46名であった。2人1組で、23組にロールプレイを依頼した。その結果、ほとんどの組が、謝罪の隣接ペアにいくつかの謝罪ストラテジーを加えた短い談話を演じた。しかし、その中に極めて入念に7分以上の謝罪場面を演じる1組があった。筆者には極めて自然な謝罪談

話に聞こえ、また本人たちも自然談話に近いと認める会話であった。実験会話であるため自然談話と同等とみなすことはできないが、全く言いよどみのない7分の演技には、協力者たちの普段からの謝罪に対する意識や価値観が強く反映されていると考えられ、分析の価値があると判断しデータとした。

設定場面は、典型的な謝罪を見るために、2人のうちの一方の被害が甚大になる場面を想定した。具体的には、協力者Aのラップトップコンピュータの上に、協力者Bが不注意でコーヒーをこぼし、画面が真っ暗に消えてしまうという場面であった。(Appendix 参照) 2人の関係は親しい友人同士と設定した。協力者は、アメリカ人男子大学生2人(ともに20歳代)で、現実にも同じ学生寮で生活をする親しい友人同士であった。実験では、実際に目の前にコンピュータに見立てたものや紙コップを置き、極力現実に近い状況で演じさせた。これをビデオとICレコーダで録画、録音し、その談話を文字化してデータとした。コーヒーをこぼすところから謝罪が完結するまでの会話時間は7分24秒であった。さらに、A、B双方の発話意図と解釈を明らかにするために、ロールプレイ直後にそれぞれにフォローアップインタビューを行い、それもデータとして使用した。

6. 分析

6.1 談話の構造

まず、7分あまりの本談話がどのような構造になっているのかを分析した。謝罪の談話とは、一般的には以下のような「謝罪-受け入れ」の隣接ペア (Adjacency pair) 部分や、それに付随するいくつかの発話を指す場合が多い。(e.g., 池田, 1993; Kumagai, 1993; Holmes, 1995; 大谷, 2004)

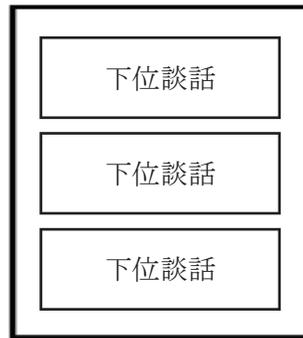
A: Sorry.

V: That's OK. (Holmes, 1989, p.197)

しかし現実の謝罪は、このような隣接ペアを含みつつも、より複雑な構造の談話になる場合が多々ある。実際、本データもそのやり取りは7分以上におよび、163ターンから成っている。そこで、その複雑な談話の内部構造をより詳細に分析するために、本談話をさらにその「下位談話」に分類した。下位談話とは、謝罪の談話の中で、ある特定の目的のために発せられた発話のまとまりと定義する。たとえば、本談話の中には、壊れたコンピュータの保険について話し合う発話のまとまり、被謝罪者が謝罪者を慰める発話のまとまり、ジョークの発話のまとまりなどが見られた。これらの発話のまとまりを謝罪談話の下位談話とする。つまり謝罪談話を、このような下位談話がいくつか組み合わさって成り立っているものと捉える。(図1) その下位談話の機能を分析することで、謝罪が完結するまでのプロセスでいったい何が行われているのかを明らかにする。

そこで、本談話を下位談話に分類してみると、以下の表1のような21の下位談話から成り立っていた。以下の節では、その中でも繰り返し現れた「問題解決の下位談話」「明示的な謝罪の下位談話」「ジョークの下位談話」に着目し、そこで何が行われているのかを分析する。

図1 謝罪談話の構造図



謝罪談話

表1 本謝罪談話の下位談話（太字は本論で扱う箇所）

本謝罪談話の下位談話	
1	パニックの下位談話
2	問題解決の下位談話 1 (PC 中のレポート課題のデータについて)
3	問題解決の下位談話 2 (PC 中の音楽と写真データについて)
4	問題解決の下位談話 3 (教授への連絡方法について)
5	明示的な謝罪の下位談話 1
6	慰めの下位談話
7	反省の下位談話
8	ジョークの下位談話 1
9	問題解決の下位談話 4 (PC の値段について)
10	問題解決の下位談話 5 (データのバックアップについて)
11	ジョークの下位談話 2
12	問題解決の下位談話 6 (PC の保険について)
13	ジョークの下位談話 3
14	明示的な謝罪の下位談話 2
15	ジョークの下位談話 4
16	問題解決の下位談話 7 (PC の保険について)
17	明示的な謝罪の下位談話 3
18	ジョークの下位談話 5
19	子供の頃のエピソードの下位談話
20	問題解決の下位談話 8 (弁償について)
21	明示的な謝罪の下位談話 4

6.2 問題解決の下位談話

本談話の中で最も多く8回にわたって見られた「問題解決の下位談話」とは、コンピュータの故障で生じた問題を解決する方法について話し合う談話である。たとえば、壊れたコンピュータの保険や弁償について（「問題解決の下位談話 4、6、7、8」）、また、コンピュータの中のデータの取り出しについて（「同 1、2、5」）、eメールが使えなくなったことで、教授との連絡の取り方について（「同 3」）が話し合われている。

この中でも特に興味深い点は、「問題解決の下位談話 1、2、3」が明示的な謝罪よりも先に現れていることである。次はその例である。

<例 1 問題解決の下位談話 1 > 注2

- 13 A: Oh. Oh, fuck. I had, had my homework stuff on there, dude, that I needed to finish tonight. Oh, I, I know you didn't mean it. It's cool.
- 14 B: Yeah, I...
- 15 A: It's cool. Don't worry about it. Ah, shit.
- 16 B: That...
- 17 A: Oh, my god.
- 18 B: Na that ... that was too ...so, how...how much was it? I mean, I got to know so I can...
- 19 A: @@ Uh... Hey, you know what, just don't worry about that, right, we can talk about it later. I just ...I got to figure out how I'm gonna get this...getting this stuff off here tonight. Ah...
- 20 B: Well, thank ...well think about it this way...
- 21 A: Okay.
- 22 B: I mean, (Pause) how important was the assignment?
- 23 A: It's final project, dude. It was ... it's pretty major. It was...I was going to present it and see how much work had been done, and all that kind of stuff. Like...
- 24 B: Oh, your professor isn't...
- 25 A: Yeah, he's ...he's cool....

まず、ターン 13 で、A は壊れたコンピュータの中にある、今夜中に済ませなくてはならない宿題の課題を心配し始める。一方、B はターン 18 でコンピュータの弁償を申し出ようとする。しかし、ターン 13 と 19 から、A が最も心配しているのはコンピュータの弁償よりも、その中の課題のデータであると理解する。そしてターン 20、22 でコンピュータに入っているデータが提出予定の大切な課題であることを確認し、ターン 24 では提出先の教授の人柄を確かめる。ターン 25 でその教授が話の通じそうな人であることを確認することで、A の宿題についての心配を軽減しようとする。

また、それに続く「問題解決の下位談話 2」では、A はコンピュータに入った音楽や写真のデータを心配し始める。

<例2 問題解決の下位談話2>

- 27 A: I gotta a ... man, I have all ... I've got all my music on there too, all my pictures.
Ohhhh.
- 28 B: Well, did you rip them from CDs or...
- 29 A: No, downloaded dude.
- 30 B: Interesting .
- 31 A: Let me ... let me see. I can just worry about the data. Like, I...I know...
- 32 B: Well, I think...
- 33 A: I know...I know we'll figure this out. I just want to figure out how to get the data off there. I probably can I get the data off.
- 34 B: You know, you can get the data off. I mean, the screen went black but it's just freaking coffee. Coffee's ... computers don't go down from getting coffee on them.
- 35 A: Well, yeah...

ターン27で、Aはコンピュータに音楽や写真のデータも入っていたことを思い出す。そこでBは、ターン32、34で、こぼしたコーヒーでスクリーンは壊れても、コンピュータ本体までは壊れていないのでデータを取り出せることを説明し、Aを安心させようとしている。

これらの「問題解決の下位談話」は「明示的な謝罪の下位談話1」に先行して現れている。つまり、*I'm sorry* のような明示的な謝罪を述べるよりも先にこれらのことが述べられているのである。日本語の謝罪では、明示的な謝罪の発話は非常に重要で、何はともあれすぐに、しかも何度も繰り返し述べられることが多いが (Kumagai, 1993; 大谷, 2004)、英語の本談話では、明示的な謝罪よりも前に、「問題解決の下位談話」が3つも現れている点は日本語と大きな相違と言えよう。

また、明示的な謝罪が述べられた後でも、「問題解決の下位談話4」で、Bは以下のようにコンピュータの弁償を申し出ている。

<例3 問題解決の下位談話4>

- 72 B: How much is that laptop?
- 73 A: Well ... I mean, it was ... it was like the latest model from ... Comp...Compaq.
- 74 B: You don't have that much money man.
- 75 AB: @@@
- 76 A: No...
- 77 B: How much was it?
- 78 A: Yeah, it was. I got to see discounts and stuff and things. So it probably was...
- 79 B: So, can't you get those again? Like...
- 80 A: Yeah.
- 81 B: ...if I give you the money and...
- 82 A: Yeah, it's cool. I can get it again. I mean, it was about like \$3000 or so. But I'm not freaking out right now because you're my friend man. If I (Unclear) come here, dude, I'd be pretty pissed, but, you know....

ターン 72、77 で、B は自分が壊したコンピュータの値段を尋ね、79 ではさらに、それがまだ入手可能な機種であるかを確認し、81 では弁償する意図を表明している。

同様に、「問題解決の下位談話 5」では、データのバックアップを取ってあるのかを B が A にたずね、バックアップが取られていることを確認し二人で安堵している。さらに「問題解決の下位談話 6、7」では、B はコンピュータに保険がかかっているのかを確認し、保険会社との対応方法を話し合っている。

このように、生じた問題について謝罪者の B がイニシアティブをとって解決方法を模索、提示しようとする「問題解決の下位談話」が本データ中に 8 回も見られた。

6.3 明示的な謝罪の下位談話

本談話中に 4 回現れた「明示的な謝罪の下位談話」とは、(I'm)Sorry. などの謝罪の定型的な発話と、それへの返答から成る談話で、従来の多くの謝罪研究が、いわゆる「謝罪談話」として注目してきた部分である。本データの中で特に興味深い点は、「明示的な謝罪の下位談話」が談話の開始部すぐには見られない事実である。最初の「明示的な謝罪の下位談話 1」が現れるのは、会話の開始から 2 分 40 秒経過した箇所、全 163 ターン中 42 ターン目からである。

<例 4 明示的な謝罪の下位談話 1 >

42 B: Yeah. Sorry.

43 A: All right.

B の謝罪の発話は、声のトーンもほとんど聞きとれない程小さく、very や so のような強調表現も用いられないきわめて簡単なものであった。さらにそれを受け入れる A も、All right. のみの簡単な返答にすぎなかった。

次に「明示的な謝罪の下位談話 2」が現れたのは談話全体の 2/3 以上が過ぎた 5 分 30 秒のターン 113 からであった。

<例 5 明示的な謝罪の下位談話 2 >

113 B: No, seriously, sorry about that, but.

114 A: Yeah, it's...hey, don't worry about it. Are you... you're really cool (ph). So, like I said, if it were anybody else, I would... I would've exploded, but I know you're a good friend, so don't worry about it. Besides... I mean, hey (Unclear) day, let's just relax, see what's going to happen and everything will be all right.

115 B: Okay. Cool.

116 A: All right.

ここでも B の謝罪は、他のストラテジーを伴わない定型発話 (sorry about that) のみであった。しかし一方で、A は、先の「明示的な謝罪の下位談話 1」の時とは異なり、B の謝罪の受け入れに、多くのストラテジーを用いて答えている。ターン 114 では、心配がいらぬこ

とを述べ、Bが他の人とは違いAにとって特別な友人であるという友情の確認を行い、すべてうまくいくという楽観的な希望を伝えながらBの謝罪を受け入れている。

このように「明示的な謝罪の下位談話1」と「2」でAの受け入れ方が大きく変わった理由には、「明示的な謝罪の下位談話1」の後の「問題解決の下位談話4、5、6」で、Bが更なる問題の解決を図ろうと尽力したことが影響していると考えられる。これらの下位談話でコンピュータ内のデータの問題だけではなく、コンピュータ本体の弁償の問題も解決されたため、その後に現れる「明示的な謝罪の下位談話2」では、Aは「1」の時よりも入念な言葉で謝罪を受け入れたのだと考えられる。

そして、本談話の最後は、次のようなBの明示的な謝罪と（ターン161）、Aの謝罪の受け入れ（ターン162）で締めくくられている。ここでもAは友情の確認をしながら謝罪を受け入れている。

<例6 明示的な謝罪の下位談話4>

161 B: This, I'm going to pay for. So, sorry about

162 A: Hey, hey it's cool. Like I said, if it was anybody else I would be mad. But it's you, so it's cool.

163 B: All right. Cool mate.

これらの点から、この談話では、問題解決が非常に重視されて入念におこなわれる一方で、定型的な謝罪発話にはそれ程は重点が置かれていないことがわかる。また、謝罪の受け入れは、問題の解決がはかられるに伴って、入念に行われゆくことが明らかである。

6.4 ジョークの下位談話

本談話でもう一つ特徴的なことは、「ジョークの下位談話」が5回見られる点である。このジョークは、ほとんどが謝罪者Bから持ちかけたジョークで、それに対して被謝罪者のAが笑うものである。以下は「ジョークの下位談話1」の部分である。

<例7 ジョークの下位談話1>

60 B: You know those you know the Vortigons?

61 A: @@@ Yes, the Vortigons indeed. You're so responsible...

62 B: No, Vogons, Vogons...

63 A: Yeah.

64 B: Thinking of Vogons. I...I have to listen to their poetry now.

65 A: Oh, yeah. Oh, yeah. It pretty rocks, and there's a lot of stuff there.

66 B: Yeah. Maybe that's why your computer died. It had Vagon poetry on it.

67 A: Maybe ... maybe that's true. I was reading *Hitchhiker's Guide to the Galaxy*.

68 B: Oh, Vagon, Vagon. Why do I keep saying Vagon?

69 A: @ I don't know. You're the one who is a fan of Dr. Simons (ph). I don't know why you keep remembering things. This...hey, just ...

ここで述べられている *Vogon* とは、SF コミック *Hitchhiker's Guide to the Galaxy* に登場する、ひどい詩を書くことで有名なキャラクターである。B はその詩が A のコンピュータに入っていたからコンピュータが故障したのではないかと、自分の責任を棚に上げるジョークを述べている。このジョークは、「問題解決の下位談話 1、2、3」「明示的な謝罪の下位談話 1」「なぐさめの下位談話」「反省の下位談話」に引き続いて 3 分 30 秒ごろに見られたものである。つまり、ある程度の謝罪のプロセスを経た後に初めてジョークが述べられている。A は、それに対して軽い笑いで応じている (ターン 69)。

このジョークは、その場の緊張した空気を和ませるだけではなく、B が A との関係を確認する働きもあったものと思われる。被謝罪者の A がジョークにのってこなければ、双方の関係は気まずいままであり、B はさらなる関係改善の対策を練る必要があるであろう。しかし、A が B のジョークに笑いで応じたことで、B は二人の関係がひどく悪化していないことを確認したと思われる。しかし、B 自身はここで笑うことはしていない。このジョークのすぐ後は前掲の「問題解決の下位談話 4」で、B はすぐに真剣な顔に戻り、コンピュータの値段の話に戻っているのである。

この「ジョークの下位談話 1」の約 1 分後、「問題解決の下位談話 4、5」を挟んで、以下の「ジョークの下位談話 2」が現れる。

<例 8 ジョークの下位談話 2 >

90 A: Let's talk about, talk about... it's stupid.(Unclear) Ha...

91 B: I mean, this is kind of funny, not really, but kind of funny, you know...ah...@@@

92 A: Oh, man.

93 B: If Steve Jobs or any were involved in this at all, we've...

94 A: Yeah.

95 B: ... we'd be pretty screwed.

96 A: Yeah, cool. I just, you know...

97 B: I should just be glad that [A: Wooooo...] you didn't spill coffee on my Mac or
[A:@@] I'd be totally...

98 [Multiple Speakers]

99 AB: @@@

ターン 91、93、95、97 で、B は壊れたコンピュータがマッキントッシュ社製の自分のものでなくてよかった、もしそうであれば (マッキントッシュの会長の) スティーブ・ジョブズに食べ物にされていたところだ、とジョークを言っている。それに対し A が大声の笑い (ターン 97、99) で応じたことでジョークが成立している。前回の「ジョークの下位談話 1」とは異なり、この談話は二人の笑いで終結しており、前回のジョーク以上に、和んだ雰囲気があり、二人の関係がさらに改善されたことを確認できたと思われる。

このように、談話全体を通して B は時々ジョークをさしはさみ、A との関係を確認しながら謝罪をすすめていく様子がうかがえる。謝罪談話におけるジョークの機能は、従来の研究では全く言及されていない。しかし、謝罪が受け入れられるまでのプロセスに視野を広げ、

また、謝罪者と被謝罪者の相互行為として謝罪を分析すると、このようなジョークも両者の関係確認の役割を果たす戦略として、謝罪談話の中で重要な機能を担っていることがわかる。

6.5 フォローアップインタビューの分析

次に、フォローアップインタビューから、談話の分析だけでは理解しにくいA、Bの発話の意図や解釈を明らかにする。Kumagai(1993)は、日本語の謝罪では、明示的な謝罪発話を繰り返し行うのに対し、英語は日本語と比較するとその繰り返しが少ないと述べている。本調査でもそれを裏付ける結果が出た。そこで、謝罪者Bが明示的かつ定型的な謝罪発話をすぐに、また、繰り返し行わなかったことを、被謝罪者Aがどのように感じたのかについてたずねた。Aは以下のように述べている。

“A lot of close friend situations are probably really realistic. I already know that he’s sorry. I feel he needs to say it (= sorry), but didn’t have to say “OH MY GOD! I’m sorry SOOOOOO sorry,” because it sounds like fake if he says too much. This is his fault, so if he didn’t offer trying to fix it, I would be very mad. If the friends try to figure out the best way to make the situation better, it sounds apologetic.”

親しい友人関係においては、大げさな定型の謝罪発話がかえって嘘くさく聞こえること、また、現実的な解決策などの申し出を謝罪として受け入れると述べている。

一方、Bは、定型的な謝罪発話をすぐに行わなかった理由として以下のように述べている。

“I tried to defuse things. Most time close friends are trying to focus on damage reduction, that’s why I’m doing this.”

Bは、謝罪において、相手の被害を少しでも減らすことを重要視していたことが読み取れる。つまり、AとBの両者の間では、定型的な謝罪発話以上に、損失や問題を解決することが結果的に謝罪となり得るといふ共通認識があり、それが今回のような問題解決型の談話になったといえよう。

7. 考察

池田(1993)は日本人とアメリカ人の謝罪行動を質問紙調査を用いて分析し、アメリカ人のほうが保障の申し出が多く問題解決型であり、日本人は謝罪の表明だけで終わりがちで人間関係重視型だと指摘している。また、大谷(2004)は日米の謝罪心理の比較で、アメリカ人英語話者は日本人以上に「自己の責任」を強く感じ謝罪していると指摘している。そして、アメリカ英語での謝罪とは、相手に与えた損害について話者の責任を認める発話行為であると結論付けた。またKumagai(1993)は、英語では、日本語ほど明示的な謝罪の戦略を何度も繰り返して用いることはないとも指摘する。

本調査の結果では、これらの英語の謝罪の特徴を、謝罪受入れまでの相互行為の中にも確

認ることができた。謝罪者は、明示的な謝罪発話を行う以上に、自らの引き起こした問題をいくつもの下位談話を駆使して解決することで、謝罪を遂行しようとしていた。これは、大谷が指摘するように、英語の謝罪では「責任」が重視され、責任を取るためには問題の解決を図る必要がある、その結果「問題解決の下位談話」が繰り返し現れるのだと考えられる。従来の研究は、謝罪の定型発話や、それに伴ういくつかの発話やストラテジーに着目するものが多かったが、謝罪の完結に至るまでの談話の分析からも、アメリカ英語での謝罪の行為特徴は、「責任を取ること。そのために問題を解決すること。」であると明らかになった。

また、謝罪の受け入れのプロセスの分析から、この問題解決の重要性は被謝罪者にも共有されていたことがわかる。謝罪の受け入れは、当初はそっけなく **All right.** と述べられるだけであったが（「明示的な謝罪の下位談話 1」）、謝罪者による問題の解決が進むにつれ、被謝罪者は二人の友情が変わらないことを伝えながら入念に謝罪の受け入れを行っていった。このような被謝罪者の謝罪受け入れの談話の変遷からも、英語の謝罪では、問題の解決が謝罪の受け入れの条件としていかに重要であるかが見て取れる。

さらに、謝罪者は、時折ジョークを挟みながら謝罪を行っていたが、これは謝罪者と被謝罪者との関係を確認し合う機能を果たしていたと思われる。問題の解決が進んだ談話後半になるに従い、ジョークに関して両者の笑いも増えてゆき、双方の関係が回復されつつあることがわかった。

このように、謝罪の完了までの談話を、謝罪者と被謝罪者の両方の発話を視野に入れて分析することで、謝罪が双方の相互的な働きかけによって遂行されていく様子を記述できた。両者の間での問題解決、明示的謝罪、謝罪の受け入れ、ジョークを通しての関係の確認、ジョークへの反応などの行為が重層的に繰り返されることで謝罪は完結してゆくのである。このことから、謝罪が必ずしも謝罪者からの一方的な行為ではないという事実が見て取れる。実際の謝罪とは、「謝罪－受け入れ」というモデル化された隣接ペア発話のように単純ではなく、このようなダイナミックな相互行為を通して遂行されていくことが明らかにできたと考えよう。

8. まとめ

本稿の分析はあくまでも1つのロールプレイ談話を見たものに過ぎず、一般化することは難しい。しかし、少なくとも本分析からは、次の二つの点を明らかにできた。一つは、アメリカ英語の謝罪が責任に基づく問題解決を重視した行為である点。もう一つは、その問題解決が、謝罪者、被謝罪者の相互行為により重層的に遂行されてゆく点である。今後は、同様の傾向が他のデータにも見られるのかを量的に見てゆく必要がある。また様々な言語間で同様の調査を行うことも不可欠であろう。

謝辞

データ収集にご協力いただいたカリフォルニア大学サクラメント校の増山和恵氏、ミシガン州立大学連合日本センターの西澤優子氏に深く感謝申し上げます。

注

1. 本研究は「平成 18 - 19 年度科学研究費補助金 (若手研究 (スタートアップ)) 課題番号 18820050 日・英語の謝罪と感謝の談話特徴と話者心理 (研究代表者 大谷麻美)」によって収集したデータを用いたものである。また、2008 年社会言語科学会第 21 回大会で行った口頭発表を大幅に加筆、修正したものである。

2. 会話の文字化記号

@	笑い
[]	同時発話
(ph)	不明瞭な発話
(Unclear)	聞き取れなかった発話
SO	音の強調

参考文献

- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Oxford: Oxford University Press. 坂本百大 (訳), 言語と行為 大修館書店 1978
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual*. New York: Pantheon Books.
- Goffman, E. (1971). *Relations in public: Microstudies of the public order*. New York: Basic Books.
- Holmes, J. (1989). Sex differences and apologies: One aspect of communicative competence. *Applied Linguistics*, 10 (2), 194-213.
- Holmes, J. (1990). Apologies in New Zealand English. *Language in Society*, 19 (2), 155-199.
- Holmes, J. (1995). *Women, men and politeness*. London: Longman.
- 池田理恵子 (1993). 謝罪の対照研究 : 日米対照研究 —face という視点からの一考察— 日本語学, 12(11), 13-21.
- Kumagai, T. (1993). Remedial interactions as face-management: The case of Japanese and Americans. 湯元昭南 桜井雅人 馬場彰 (編), 松田徳一郎教授還暦記念論文集 東京: 研究社 pp. 278-300.
- 三宅和子 (1993). 視点の観点から見た「感謝」と「詫び」: 慣用表現とともに使われる表現: 日英比較 東洋大学短期大学紀要, 25, 203-214.
- Murata, K. (2002). Interpreting an apology: A problem of uptake. 早稲田大学教育学部学術研究, 50, 1-15.
- 中田智子 (1989). 発話行為としての陳謝と感謝: 日英比較 日本語教育, 68, 191-203.
- 大谷麻美 (2002). 謝罪慣用表現と謝罪心理: 日・英対照研究 日本英語コミュニケーション学会紀要, 11(1), 17-26.
- 大谷麻美 (2003). 日・英語における謝罪と感謝: 背景心理からの分析 日本英語コミュニケーション学会紀要, 12(1), 140-152.

- 大谷麻美 (2004). 謝罪と感謝の日・英対照研究：話し手の心理からの考察 お茶の水女子大学
学位請求論文
- 大谷麻美 (2008). 謝罪はどのように遂行され、どのように解釈されたのか：英語の謝罪談話
のケーススタディー 社会言語科学会第 21 回大会発表論文集, 64-67.
- Searle, J. R. (1969). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge:
Cambridge University Press. 坂本百大 土屋俊 (訳), 言語行為：言語哲学への試論.
勁草書房 1986
- Tanaka, N. (1991). An investigation of apology: Japanese in comparison with Australian.
Meikai Journal Faculty of Language and Cultures, 4, 35-53.
- Tanaka, N., Spencer-Oatey, H. & Cray, E. (2000). 'It's not my fault!': Japanese and English
responses to unfounded accusations, In H. Spencer-Oatey (Ed.), *Culturally speaking*,
London: Continuum, pp. 75-97.
- Thomas, J. (1995). *Meaning in interaction*. London: Longman.
- 山梨正明 (1986). 発話行為 東京：大修館書店

Appendix

ロールプレイの指示文

Informant A

You are a university student. You are net-surfing with your close friend B. The computer belongs to you. Carelessly, B spills his/her coffee on your computer. The computer screen goes black. What do you say to him/her? Your partner starts first.

Informant B

You are a university student. You are net-surfing with your close friend A. The computer belongs to A. Carelessly, you spill your coffee on his/her computer. The computer screen goes black. What do you say to him/her? You start first.